



Community 4 Children

地域は子どものために、子どもは地域のために

Children 4 Community

一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン
2021年度事業報告・決算書
(2021年6月1日～2022年5月31日)
2022年度事業計画・予算書
(2022年6月1日～2023年5月31日)



連絡先：一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン
〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町1丁目45番1-302号
電話 06-6622-5645 /Fax 06-6621-7139
E-mail community_4_children@yahoo.co.jp

はじめに

一般社団法人 コミュニティ・4・チルドレン（以下、C4C）は、皆様の温かいご支援に勇気をいただき、コロナ禍でもつながりを切らさないように 2021 年度（2021 年 6 月～2022 年 5 月）の活動を規模縮小ではありますが実施することができましたので報告をいたします。

新型コロナウイルスは感染力の強い変異株が発生し、いったん終息の希望が見えていた状況を変えてしまいました。各国各地域の事業に引き続き大きな影響を与えています。

このような状況の中でも現地団体とは定期的にオンラインで状況の共有、各国の工夫した事業展開の報告を受け、感染の拡大や低下を捉えつつ、どのように事業を展開していくかについて話し合いを続けています。他国の取り組みに興味を示し、また、参考にしようともしています。

事業報告では、現地団体のコロナ禍での取り組み状況をご覧いただくと共に、2022 年度（2022 年 6 月～2023 年 5 月）の事業計画では日々の取り組みに加えて新たなチャレンジについても確認の上、ご支援いただきますようお願いいたします。

皆様には、今後も C4C 便りやホームページ、ブログ等を通じて、現地情報をお伝えしてまいります。また、ご参加いただける取り組みへのお誘いもしてまいります。



～ 目 次 ～

・ はじめに	- i
・ 2021 年度事業報告書	- 1
1. NGO 支援事業	- 1
1-1. 海外支援事業	- 1
A. フィリピン国 JPCOM-CARES 支援事業	- 1
B. タイ国ノンメック村コミュニティ支援事業	- 9
C. 海外プロジェクト助成事業	- 17
1-2. 国内支援事業「宮城県における連携・協働で取り組む福祉・防災学習推進事業」	- 18
2. 文化交流活動支援事業	- 22
2-1. スタディツアー	- 22
2-2. Zoom でつなぐ C4C4 が国会議—国際ネットワーク交流	- 22
3. 視察・研修・ワークショップなど	- 23
3-1. 研修事業	- 23
3-2. 国内 IDoCafé 事業	- 24
4. パートナーシップ推進事業	- 24
5. 情報提供事業	- 24
6. 組織運営	- 25
・ 2021 年度貸借対照表	- 26
・ 2021 年度財産目録	- 26
・ 2021 年度決算報告書（損益計算書）	- 27
・ 2022 年度事業計画書	- 30
・ 2022 年度事業予算書	- 33

2021年度コミュニティ・4・チルドレン（C4C）事業報告書

Community 4 Children

2021年6月1日～2022年5月31日

1. NGO 支援事業

1-1. 海外支援事業

フィリピン共和国ルソン島山岳部の JCom-CARES とタイ王国コンケン県ノンメック村と連携し、運営・活動を支援してきました。またカンボジア王国の NGO/Khmer Community Development と協働で、ベトナム社会主義共和国の国境に接するカンボジア王国農村の子ども会活動および有機農業推進活動の支援を継続しています。

A. フィリピン JCom-CARES (フィリピン共和国バギオ市、ベンゲット州カバヤン町) 支援事業

JCom-CARES (ジェイピーコム ケアーズ) は、必要な公共サービスや社会資源が限られた山岳部バギオ市、ハッピー・ハロー村(バギオ市内)、カバヤン町を拠点に、障がいのある子どもや青年層が地域で自立し尊厳のある暮らしを営める地域づくりに取り組んでいます。

◆事業対象者数（人）

2021年6月～2022年5月の期間、下記の障がいのある方々を対象に事業を行いました。

地域	期間	人数
バギオ市 / ハッピーハロー村	2021/6～8	74
	2021/9～11	72
	2021/12～2022/2	73
	2022/3～5	83
カバヤン町	2021/6～2022/5	58

1. リハビリテーション&保健プログラム

(1) リハビリテーションセンターSTAC5 (スタッフファイブ) での理学療法、作業療法、教育支援

作業療法では、日常生活動作や手先の巧緻性を高める練習、読み書き計算、言葉の習得や発声の練習、集中力や社会性の習得など、一人ひとりの障がいや状態に合わせた療育を行いました。認知力や微細運動が向上した、鉛筆や道具を使えるようになった、発声がよくなり発音が良くなった、自分がしたいことを相手に伝えられるようになった、アイコンタクトが取れるようになったなどの成長が見られました。

理学療法では、一人ひとりの身体状態に合わせて、必要なエクササイズや運動を実施しました。保護者にも療育に参加してもらい、家庭でできる運動やサポートテクニックの指導を行いました。立位や座位がとれるようになった、手を握る・開く動きがスムーズになった、筋力や体幹バランスが向上した、自立歩行の距離が延びた、姿勢が改善したなどの変化が見られました。その一方で、新型コロナウイルス感染症によるコミュニティ封鎖で療育を受けられない期間が発生し、療育回数が減少することで、筋力低下

や改善していた体幹が元に戻ってしまった子どもがいました。

新型コロナウイルス感染症禍で在宅での療育を希望するご家庭には、オンラインでサポートも継続しました。家庭での様子や困りごとなど聞き取りを行い、保護者へのコーチングとリハビリテーション研修やセミナーも実施しました。

◆リハビリテーション利用登録者数（人）

理学療法	作業療法	計
18	28	46

◆リハビリテーションサービス提供数（回）

理学療法	作業療法	計
855	1119	1974

(2) 医薬品の提供

子どもたちや保護者が、健康的な暮らしを営めるようにビタミン剤や一般的な風邪薬、鼻炎薬など、必要な医薬品の提供を行いました。特に、新型コロナウイルス感染症の流行後、保護者からは、ビタミン剤のニーズが高まっていました。医薬品に充てていた費用を使い、おむつ代や栄養補助食品など、子どもたちに必要なものを購入し提供しました。

ビタミン剤は、3ヶ月ごとに提供し、子どもたちの健康観察も行いました。寒暖差が激しい季節には、咳や発熱など体調を崩す子どもたちがいましたが、保護者からは、ビタミン剤が回復に役立ったと言う声が聞かれました。体調不良時の早期受診、栄養バランスのとれた食事、エクササイズや運動など、子どもたちの健康や体力維持に関する情報提供を行いました。

◆提供人数（のべ）

バギオ市	カバヤン町
子ども 196 人 保護者：72 人	子ども：46 人 保護者：0 人

(3) 感染予防セットの提供

子どもやご家族が、家庭や地域で安心して生活できるように、新型コロナウイルス感染を予防する衛生用品のセットを提供しました。

提供人数（のべ）	キット内容
バギオ市 子ども：112 人 保護者：72 人	子ども用マスク、大人用マスク、手指消毒用アルコールスプレー、ハンドソープ、石鹸、歯磨き粉、歯ブラシ

(4) アウトリーチプログラム

複数の地域に出向き、自治体と連携し、その地域で暮らす障がいのある子どもたちにビタミン剤や感染予防セットの提供を行いました。子どもの療育について悩む保護者には、JPCOM-CARES の活動や専門医に関する情報提供を行いました。

訪問地域	提供人数
カバヤン町 Batan 区	6 人
カバヤン町 Ballay 区	20 人
カバヤン町 Kabayan Barrio	6 人
バギオ市内 East Modern Site 区	5 人
バギオ市内 Punong 区	6 人
バギオ市内 Gibraltar 区	6 人



(5) 医療サービスや医療機関の紹介・照会

STAC 5 で適切な療育サービスを提供するため、連携する専門医・医療機関と繋がりました。

	人数	連携機関	内容
8 月	1 人	小児科医	発育状況のフォローアップ・再評価を受けました。
8 月	1 人	アレルギー・免疫科 小児科医	発疹の受診に行き、抗生物質等が処方されました。
8 月	1 人	リハビリテーション 科医	歩行・握力・腕の可動域の診察を受けました。バランスや運動感覚、歩行訓練や筋力トレーニング、認知スキルなどに焦点を当てた作業療法と理学療法の継続を助言されました。
9 月	1 人	病院の理学療法士	側湾症の状態を確認するため、X線検査を受け、医師と理学療法士による診断を受けました。
9 月	1 人	小児科医	言語障害を伴う自閉症スペクトラムと診断されました。週 2～3 回の作業療法と自宅での認知機能を刺激するプログラムの継続を助言されました。
10 月	1 人	小児科医	発達診断を受け、ダウン症と診断されました。集中力や注意力、感情コントロール、微細運動や ADL、言語療法など様々な側面から、作業療法を継続するように助言されました。この診断を受け、社会福祉開発局の財政援助申請をする準備をサポートしました。
2 月	1 人	小児科医	発育状況のフォローアップ・再評価を受けました。斜視があり、小頭症であるとの診断を受けました。理学療法を継続すると同時に、集中力や注意力を高めるために作業療法も受けることを勧められました。また、電気療法など追加の理学療法を行うため、病院内のリハビリ部門で療育を受けることも勧められました。
3 月	1 人	神経科医	体の拘縮を減少し、柔軟性を維持していくために、理学療法の継続を助言されました。
5 月	1 人	小児科医	発達診断を受け、自閉症を伴う知的障害、脳性麻痺の診断を受けました。理学療法と作業療法を継続するよう助言されました。

(6) 保健プログラム：健康フェア

3月25日、バギオ市の12人の子ども、22人の保護者を対象に、耳・鼻・喉の健康診断を行いました。特に、耳は適切にケアができていないことが多く、医師による観察と耳垢掃除を行っていただきました。

(7) 家庭訪問

オンラインで理学療法を受ける子どもの身体状態の評価を目的に、家庭訪問を行いました。自宅の環境やアクセシビリティ、保護者の療育の様子や子どもとの関わりを確認することができました。

	訪問人数	内容
8月	2人	自宅内が狭く、療育に十分なスペースを確保することが難しい環境でした。自宅から主要道路までは母親が抱えて移動しており、子どもの成長とともに体重が増え身体も大きくなり、体力的に難しくなっていました。
9月	1人	階段や坂が多く、地面には植木鉢が置かれ、松葉杖や補助器具を使うには危険な環境でした。手すりの設置や段差の解消が必要であることがわかりました。
11月	2人	大通りから離れた場所に自宅があり、手すりのない階段や滑りやすいなど、転倒リスクが高い環境でした。室内で療育するには、十分なスペースを確保することが難しい状況でした。

(8) セミナー&研修

保護者や地域の関係者の知識や理解を深めることを目的に、障がい理解セミナーを行いました。

日時	地域	参加人数	活動内容
7月28日	バギオ市	保護者8人 自治体役員8人	【テーマ：自閉症・知的障がい】 障がい特性や必要な支援、障がい者の身分証明書の取得方法や利用できる制度などの説明を行いました。
7月29日	バギオ市	保護者3人 自治体関係者7人	【テーマ：脳性麻痺】 JPCoM-CARESの理学療法士が講師を務め、てんかん発作が起きた際の対応方法について指導しました。自治体関係者からは、特別なニーズを持つ子どもたちについて理解する機会になった、今後も住民のためのセミナーの開催を考えていきたいという感想がありました。
8月24日	バギオ市 STAC5	保護者7人	【テーマ：理学療法研修&ワークショップ】 新型コロナウイルス感染症の影響により、STAC5に来所して理学療法を受けることが難しい状況にある子どもたちが、障がいの重度化を予防するためには、継続したりハビリテーションの提供が重要です。家庭で定期・継続的にエクササイズを実施することの重要性と具体的なテクニックを保護者の方々に研修で伝えました。

8月25日	バギオ市 STAC5	子ども3人 保護者5人	【テーマ：作業療法研修&ワークショップ】 保護者自身の自己理解、自身の子どもの長所や特性についての理解を深めるため、対話を行いました。痛癢やこだわりへの対応など、保護者たちの悩みが共通していることがわかりました。学校生活や将来について様々な不安な気持ちや対処法のアイデアを共有しました。
2月24日	バギオ市 STAC5	子ども4人 保護者10人	【テーマ：スキルアップ】 子どもにとって最も大切なものは何か、成長に伴う課題や問題点、積極的なレスパイトの時間の重要性について話し合いました。

※以下、自治体と連携し、地域にアウトリーチして研修を行いました。

日時	訪問地域	参加人数	活動内容
3月22日	Irisan	25人	【テーマ：障がいの早期発見・予防・介入セミナー】 各村の議会メンバー、リーダー、保健師、青年議員メンバー、障がい者グループ代表、保育士、ボランティアが参加しました。 一般的に言われてる障がい特性や必要な支援、障がいの者の身分証明書の取得方法や利用できる制度などの説明を行いました。また、障がい者グループ代表の方からは、地域で暮らす障がい児・者に対してどういった配慮や関わりが必要か、経験談から話をさせていただきました。 参加者からは、地域で気になる子どもがいるが、どのように保護者に働きかけたらいいか、アプローチの方法についての相談があがりました。
4月12日	Tadiangan	30人	
4月19日	Middle Rock Quarry	26人	
4月22日	Gibraltar	29人	
4月26日	Brookside	27人	



今年度も対面授業が再開されず、プリント課題やオンライン授業での在宅学習が続きました。保護者からはサポートが大変だったという声も聞かれましたが、ほとんどの奨学生は成績が上がり、無事に進級することができました。休暇中に雑貨店でのアルバイトや日雇いで農業の仕事をするなど、自身で副収入を得ている奨学生もいました。しかし、4人は、学習の困難さ、家族の介護、生活のために働くことを選択し、退学・進学辞退しました。学年があがるとともに課題も難しさが増し在宅学習に困難を感じている、外出や人と交流する機会が減りソーシャルスキルを学ぶ機会が減っていることが懸念されます。

12月7日と5月30日に、バギオ市の奨学生と保護者が集いました。奨学生メンバーの繋がりづくりを目的に、グループ活動の計画について話し合い、バギオ市内の観光地散策や植林活動を行うことを決定しました。

地域	小学校	中学校	高校	大学
バギオ市	7	2	0	0
カバヤン町	1	0	13	1
合計	8	2	13	1

(2) 学用品の支給

10月28日、長年に渡り学用品などの寄付をくださっている先生より、カバン、クレヨンや鉛筆、用紙、アルファベットや図形パズルを寄付いただきました。セットにして就学中の9人の子どもたちに配布しました。

3. 自立生活プログラム

(1) プログラムの実施

障がいを持つ子どもや青少年が、家庭や地域社会で自律・自立した暮らしができるように、生活スキルや社会のルールやマナー、コミュニケーションスキルの習得や向上を目指し、一人ひとりに合ったプログラムの提供を行いました。座学と実践を組み合わせ、一人ひとりの習得度に合わせ、繰り返し実施しました。居住エリアのロックダウン等で、センターに来所出来ない子どもたちには、オンラインでの訓練や保護者に自宅での様子をビデオ撮影してもらいフィードバックを行うといった形で実施しました。子どもたちが集中して楽しく興味を持てるような工夫をして進めました。口頭での指示のみでできるようになった、サポートが最小限になってきた、運動嫌いが緩和されたなどの変化がありました。



	参加人数	実施回数	内容
6月	3人	6回	✓コミュニケーション (挨拶、会話、非言語コミュニケーション、アイコンタクト、話を聞く、敬語の使い方)
7月	3人	5回	
8月	3人	9回	
9月	3人	8回	✓マナー ✓身だしなみ (保清、着衣、トイレの使用法、足・爪・耳・脇・髪・鼻・顔・口腔内のケア)
10月	3人	7回	
11月	5人	12回	✓家事技術 (掃除、皿洗い、テーブルセッティングと片付け、ゴミの分別、洗濯、洗濯たたみ、床拭き、モップ掛け)
12月	3人	6回	
1月	5人	12回	
2月	4人	7回	✓調理技術
3月	5人	10回	
4月	6人	10回	
5月	6人	10回	

			(食品の準備、衛生管理、包丁の使い方、ガスコンロの使い方、調理、片付け) ✓裁縫技術 ✓アート&クラフトづくり ✓健康維持(体力づくり、エクササイズ)
--	--	--	--

4. 保護者のエンパワメント

(1) 生計向上プロジェクト

2人の保護者が、各家庭で軒先ガーデン(サバイバルガーデン)の活動を続けています。JPCOM-CARESから提供された野菜の種子を使い、トマト、レタス、オクラ、白菜、ゴーヤ、じゃがいも、さつまいも、マメ、唐辛子、ねぎなどを育てています。長雨による日照不足で育ちが悪いこともありましたが、家庭消費分は収穫できました。YouTubeでガーデニングの方法を学んだり、ビニールをかぶせたりなど様々な工夫を行うほか、植え付けの時期やタイミングの見極めや防虫など、互いの経験や技術を共有し学び合いながらプロジェクトを進めています。また、美容商品や日用消耗品、古着などのネット販売など、積極的に新しいビジネスにも挑戦しています。

(2) ワークショップ・研修・行事

保護者が集い、悩みや気持ちを聞き合うシェアリングの場づくりを行いました。

日程	場所	人数	内容
3月30日	ボタニカルガーデン	13人	保護者に悩みや問題をポストイットに書いてもらい、聞き合うシェアリングを行いました。感覚過敏、自傷や他害行為、こだわり、衝動性、日常生活動作の遅れ、家族の対応方法、てんかん発作時の対応方法など、様々な悩みが出ました。子どもの成長過程で苦労したことや経験を共有し合いました。深刻な課題を抱えている保護者に対しては、家族カウンセリングを受けることを助言しました。
4月8日	STAC5	4人	子どもとの関わりの中で幸せなことや心配なことを話してもらいました。地域での生活や親が亡くなった後のことなど、様々な不安について話し合いました。
4月11日	STAC5	6人	保護者に子どもの将来や目標について話してもらいました。てんかん発作の前兆症状、対処方法に不安を抱える保護者がいたため、前兆症状の情報共有を行いました。
5月18日	STAC5	13人	母の日を記念し集い、保護者同士の繋がりづくりを行いました。



5. 権利擁護・コミュニティ啓発活動

人が集う活動への規制があり、大規模な啓発活動は実施できませんでしたが、地域に出向いて研修を小規模で行いました。（※参照：1. リハビリテーション&保健プログラムの（8））

6. ネットワークづくり・社会資源の活用

（1）ネットワークづくり

地域パートナーや各関係者・機関とのネットワーク構築のため、下記の行事を実施しました。

日時	行事	参加人数	内容
12月11日	クリスマス ギフトギビング	子ども 68人 保護者家族 91人	元バギオ市副市長や地域パートナーのご協力のもと、食料品の詰め合わせパック、感染予防セット、学用品、毛布、お米などをプレゼントしました。
12月14日	クリスマス ギフトギビング	子ども 16人 保護者家族 19人	バギオ・ベンゲット医師会のご協力のもと、お米5キロと消毒用アルコール2本ずつプレゼントしました。
12月16、 17日	クリスマス ギフトギビング	子ども 49人 保護者家族 49人	フィリピン小児医療学会など複数の地域パートナーのご協力のもと、フルーツ盛り合わせ、ブランケット、スナック、サンダル、お米、消毒用アルコール、タンブラーなどをプレゼントしました。

（2）自治体（社会福祉開発局）の支援のコーディネート

社会福祉開発局が、リハビリテーションや医療が必要な子どもを対象に行っている経済支援を受けることができるように、申請手続きのコーディネートを行いました。6人が3,000～5,000ペソの支給を受け、治療費や薬代などに充てることができました。

（3）新型コロナウイルス感染症ワクチン接種

3月24、25日、地域パートナーの協力のもと、接種会場に並ぶことが困難な子どもや保護者を対象に、STAC5にてワクチン接種を行いました。保護者6人、子ども1人が接種を受けました。

（4）コミュニティパントリー（社会資源の活用）

センター内にコミュニティパントリーを設置し、多様な組織や個人から寄贈していただいた物資を必要な子ども・ご家庭に配布しました。

寄付人数	寄付内容	受取人数（のべ）
13人	粉ミルク、お米、卵、野菜、紙おむつ、服、靴、おもちゃ、ビタミン剤、日用雑貨	149人

（5）ファンドレイジング活動

① 募金箱の設置

オフィスやレストラン等にご協力いただき、募金箱を設置しました。多くのお客様の目に触れる場所に設置していますが、回収できるほど集まっておらず、今年度は一部未集金となっています。

② ラッフルプロジェクト

地域パートナーより景品の一部を商品提供してもらい、抽選会を行いました。48,991ペソの資金を得ることができました。

【成果と課題】

2021年度は、コミュニティ隔離や行動制限も少しずつ緩和され、少人数の集いや地域間の移動もしやすい状況となり、昨年度活動目標に掲げていた地域へのアウトリーチ活動を進めることができました。5つの地域に出向き、自治体と連携して、障がい理解セミナーを開催することができました。各区のリーダーや議会メンバー、障がい者グループ代表など、地域づくりを担う方々が多数参加し、次年度に繋がるネットワークづくりができました。一方で、自主財源獲得のために取り組んでいたチャリティ・ランやチャリティ・ズンバは実施できず自主財源が十分に確保できませんでした。

B. タイ国ノーンメック村コミュニティ支援事業

コンケン県ノーンメック村において、子どもを見守ることができるコミュニティ作りを応援する様々な事業を展開しています。事業は、有機農業普及と伝統文化の復興を柱に自然と共存しながら収入の向上を図っています。まずは大人たちが自分たちのコミュニティの中で絆を強化し、農民としての生き方に自信を持ち、経済的にも自立できるようになることが、子どもたちを健全に育てる基盤となります。そしてコミュニティのために貢献する若者を育てることへとつながります。

2021年度は新型コロナウイルス感染症拡大を止めるためワクチン接種が広く行われたこともあり、経済活動を再開する方向に政府も方針を代え、観光業をはじめ様々な業界で人やモノが動き始めました。しかし、新型コロナウイルス感染症に感染する人は増加し、ノーンメック村の住民の多くが感染し自宅ですべて自粛となりました。集落内での人の集まりは時に応じて禁止されたため、本事業の活動は主に実験農場で行うようになり、以下のような活動を行いました。

1. 有機農業の普及

◆子どもとコミュニティのための有機農業実験農場での稲作
有機農業実験農場（村人から無償で田んぼを借りています）
参加者；ノーンメック村と周辺村の成人、青少年約42人（田植え時）、36人（稲刈り時）

互助である『結』で田植えと稲刈りを行うことは、自分たちのルーツや文化を忘れないためにも重要です。『結』を復活させて6年目を迎えた2021年は、まだ新型コロナウイルス感染症の影響が強く、ノーンメック村内でも感染者数が多く出ました。月によっては集会在禁止されたり、また禁止されなくても村人たちが新型コロナウイルス感染症感染を恐れて集まりに出てこなくなりました。しかし年中行事化した『結』においては、ノーンメック村住民だけ



でなく、周辺3か村やネットワーク交流で出会った他県の有機農家も参加し、米の収量も肥料袋32体（もみ付き米で約1300kg）を得ました。

土地改良のために継続して投入している、緑肥（マメ科植物であるサンヘンブ）、堆肥・液肥が土地の質を確実に向上させているようです。またマメ科の植物を稲作後に植えることによって、窒素固定ができ雑草除けにもなり、土が水分を含むようになります。今年も、ガソリンや化学肥料の価格が急騰したこともあり、堆肥づくりに関心を持つ人が増えました。様々な材料から堆肥を作ることができますが、5月には枯れ葉2トンを購入し、様々な方法を学びながら、牛糞や鶏糞を使って村人たちと堆肥を作りました。堆肥は、それぞれが持ち帰り自分の田畑に投入しました。

日時	参加者・人数	活動
6月13、23、26日、 7月20、26日、8月3、6 -7日	ノーンメック村住民とスタッフ 4-6人	田植えの準備；雑草刈り、水入れ、苗床作り
8月7、8日	青少年7人	田植え用に苗準備
8月8日	ノーンメック村および周辺村 住民42人 内大人27（女17男10）、青少年 4（女1男3）、子ども11（女5 男6）	『結』田植え
8月9、13、17、20、24日	4-5人	稲や田んぼの状態を観察、液肥投入
9月5、10、15、24、30日	4-5人	田んぼの水の調整、堆肥投入、除草
10月2、7、10、14、17、31日	3-4人	雑草抜き
11月21日	36人 内大人26（女15男11）、 青年（女1男3）、子ども6（女2 男4） ノーンメック村および近 隣村住民、他県のネットワー ク・グループ	『結』稲刈り
11月26、27日	19人	稲の運搬、脱穀、米蔵へ入れる
12月15日	4人	緑肥（サンヘンブ・マメ科植物）播植
1月11、17、26日	3人	田起こし、土地改良のため堆肥投入
2月16、17、19、20日	3人	雨季に向けての準備、田起こし
2月21、23日	4人	稲刈り後の土地改良
4月21、23日	6人	緑肥（マメ科、トウモロコシなど）播植
5月6、16日	6人	緑肥（サンヘンブ）を刈り取る サンヘンブの種を取る
5月7-8日	15人（女10男5）	堆肥作り

◆自立のための農業普及活動

新型コロナウイルス感染症の影響で、人々が集まることが困難になった前年度から、ノーンメック村とその周辺村の人々の求めに応じて有機農業の方法を教え、有機農業を続けられるよう実際に行っている方法を個別の田畑で指導しています。新型コロナウイルス感染症の影響によって出稼ぎから帰ってきた人や自らの健康に関心を持った人たちの中に、新たに有機農業や多角経営を目指す農民が増えています。当初は、有機農業をすでに実践する農民とスタッフが田畑を訪問し、現場で技術指導、相談、種苗配布・分配などを行い、実践し続けることができるよう支援することから始めました。その後、持ち回りで農家が食事を提供し、関心のある人々が自由に参加できる交流の場となりました。その場では、何をどのように植え育てるだけでなく、付加価値を高める加工方法や、販売できる市場はあるかなど具体的な商品化と収入向上を目指す話し合いを行いました。市場の状況を視野に入れると、どのように土地を利用したらいいのか、何を栽培するのかを考えるきっかけになりました。

3月27日には、実験農場で、21人が集まりワークショップを行いました。炭火で薬草を乾燥させ、薬効成分を凝縮させる方法、その他加工など収入増に向けた新しい方法を試してみました。「多くの人が新型コロナウイルス感染症に罹っている。家族のためにも食べ物と薬は自分たちで調達したい」と言う村人の意見があり、体によい食べ物や薬草に対する関心も高いため、このような薬草などの知識と実践を共有しました。

1年間で延べ47人の農民が参加し、約20人がコアなメンバーとして有機農業ネットワークを形成しつつあります。新型コロナウイルス感染症禍の過去2年間、地道な個別訪問を通じて、多くの農民に努力が見られ、土地の利用方法が変化しました。情報提供や情報交換の成果として、自分の土地にあった作物、家畜の飼育を選び、市場も念頭に入れて検討し、とても多様な農業経営に発展しました。たんぱく質を多く含むアカウキクサを育て、魚のえさにすると同時に肥料として利用する方もいます。残りを販売し毎月500~600パーツ(約2000円)の収入になるそうです。また他にもケールを育てて、スクミリングガイ(ジャンボタニシ)をネット販売する人もいました。今後は、より一層市場や商品化を目指す議論へと向かうことになるでしょう。

2. コミュニティ文化の継承

◆寺院やコミュニティでの行事参加@ノーンメック村寺院、ノーンメック村内

日時：7月16、17、24、25日、8月16、23日、9月6、14、21日、10月6、14、21日、11月7日、12月3日、1月8日、2月14、20日、3月3、6日、4月18、19日、5月5-8、19日

雨安居期の仏日、村人の葬式、仏教行事、子どもの日の行事、水かけ儀礼などの際、スタッフが子どもたちを連れ、飲み物を差し入れたり、行事のお手伝いをしました。有機農業実践農場で収穫した米(もみ付きを肥料袋2袋)を寺院に寄進し、食べる米がない世帯に安価で売り、その収益を寺の維持費としました。まだ新型コロナウイルス感染症の影響があり、多くの人が集まることはできませんでしたが、タイ正月には個別に村落議会の委員たちを訪問し、健康や長寿を願う水かけ儀礼を行いました。

◆コミュニティ青年ボランティア（子どもの居場所づくり）

放課後や週末の子どもたちの居場所として、いつでも好きな時に子どもたちは遊びに来てよい場所としてスタッフの家と敷地を開放してきました。しかし、村内でも多くの新型コロナウイルス感染症の感染者が見つかるようになって、集まることができなくなり、ボランティアも来なくなったため、あまり活動することができませんでした。しかしローカルスタッフの家に来ることは禁止していないため、週末には何人かの子どもたちが静かに読書したりお絵かきして過ごしていました。



1月3日にスタッフの指導による草木染体験を行いました。その時は、23人(子ども15人と保護者8人)の村人が参加してくれました。葉や花を叩いて布に色を移し、いろいろなデザインや形を楽しく一緒に染めました。

3. 森林保護・保全、有効利用活動

◆植林@ノーンメック村公共地(約15ライ、1ライ=1600平方メートル)

森を愛する心を育て、自然資源を適切に利用するため、将来も森林を利用することができるように森林保護活動を続けています。13年間も他村の農民がキャッサバを植えていたところを、4年前に私有地と村の公共地の境界を明らかにし、柵を建てて、村人が苗木を植え、多様な樹木を含む森を育て始めました。そして年に一度、雨季の始めに無償で助け合う『結』の伝統を復活させ、村人と一緒に植林しています。



定期的にスタッフや住民による見回りや世話を続けており、水牛を放牧して苗を食べさせていた飼育者の元を訪れて注意したり、生ごみを不法投棄する者を近づけないようにしています。森を世話することによって、キノコがたくさん生え、村人の食卓に上がるようになりました。また森林保護や植林に対する関心が高まり、自分の土地や寺院境内に植林する住民も増えました。枝打ちなどの森林管理の研修に行き、自分たちでも枝打ちをするようになりました。

日時	参加者	活動
6月8, 15, 20, 25日	ノーンメック村住民3-4人; スタッフ2人	下草伐採、土地の整備、苗木準備
6月27日	ノーンメック村および周辺から村人44人(女性14;男性11;子ども11;青年3;僧侶3;スタッフ2)	『結』による植林
7月10, 20日	ノーンメック村住民3-4人; スタッフ2人	下草伐採、土地の整備、植林
8月5, 21日		苗木の成長の状態視察
9月2, 15日		公共林の状況を見まわり
10月10, 30日		除草、下草伐採

11月7日		追肥
12月15日、2月10日	スタッフ2人	公共林の状況を見回り
2月13日	ノーンメック村住民12人;スタッフ2人	下草伐採、土地の整備、追加植林
3月25日、4月21日、5月13、15、30日	スタッフ2人	苗木の成長の状態視察

◆青少年によるコミュニティ内植林のための種苗作りと収入向上

日時：10月19、31日

参加者：ノーンメック村住民15人（女性11、男性4）

村人たちが植林に関心を持つようになり、自分の土地（自宅の敷地や田畑）でも植えたいという人が増えました。これまでは、村の青年が子どもたちと一緒に学びながら森で採集した種苗をビニールハウスで育てていましたが、栽培人に種苗の増やし方を学んでもらい自分で実践してもらおうとネットワーク交流で知り合った隣の農民を講師として招聘し研修を行いました。苗をビニールポットに入れて、配布、交換、販売を行い、11人が自宅に持ち帰り植えました。



これまで苗木ポットを販売することで、活動に参加した子どもたちの副収入向上を目指してきましたが、2021年度は、子どもたちで集まることができなくなったため、大人たちだけで手に入りにくい種苗を増やし、種子を保全しながら収入向上も目指す活動となりました。

◆植林と自立のための農業モデル村から学ぶ視察・研修

日時：2月6日 @カラシン県ナークー郡サイナーワン行政区クッターカイ村コークノーンナー研修センター、クチナライ郡ソムサード行政区ソムサード村ピークマーイ村の森

参加者：ノーンメック村住民16人（女10、男4、子ども2）



前年度は新型コロナウイルス感染症禍のため研修ができませんでしたが、少しずつ他村のモデルからの学びを再開しています。今回は、比較的高地の水が少ない土地における農業デザインを学びました。研修先は、干ばつや洪水に対応し、野菜作りのための小規模用水路を作り、森を育てた夫婦の農場でした。バンコクでフランス料理のシェフとして働いた経験がある夫婦が、実家に帰ってゴム農園を始めましたが、有機農業に出会ってそれまでのゴム農園をやめて、多様な木を植え、森を育てて今に至った経験の共有や、自然で安全な食材が手に入ることの重要性について学ぶことができました。

◆水利管理研修

日時：5月20、21日 @実験農場

参加者：ノーンメック村および周辺村の農民 21 人

水不足はこの地方共通の課題です。2020 年 3 月より定期的に起こる干ばつに対処するため、地下水をうまく管理・利用するための視察・研修を行ってきました。そして得た知識を自分の土地で応用実践する人が増えました。そして自分の経験を他の人々に伝え始めました。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、村外での研修を中止にし、実験農場で近隣村住民だけで実施しました。すでに研修に参加して水利管理の実践をしているレックさん（実験農場の土地所有者）が行う地下水利用方法を彼の農場で観察しながら知識や経験を学ぶ場としました。

地下水の引き方、どのように井戸や地下の水源を管理しているのかについてレックさんから説明を受けて、水利管理について学んだ後、それぞれが実践しました。

今後もノーンメック村の有機実践農場に貯水モデルを構築する取り組みは続きます。

4. 健康向上プロジェクト

日時：3 月 26 日 @実験農場

参加者：ノーンメック村と隣村の住民約 30 人

病を知り、身近なもので自分や家族を癒すために、その治療法、特にタイ方医学の知識を学び、実生活に応用できるように 2021 年度から安全な食や生活習慣に気を付けて健康を増進させる研修を始めました。

今回は、「病・薬草・処方」についての情報をタイ方医であるレックさんから学びました。実際に、森の中に入って薬効のある植物を見つけるところから始め、医薬同源の原理、ハーブの利用法などを熱心に学びました。お互いの健康に関する情報交換も行い、各人の悩みを聞いていくと、糖尿病、腰痛、甲状腺機能障害、肥満、目、アレルギーなど多くの病気が身近に多くあることがわかりました。

新型コロナウイルス感染症禍の状況が改善されれば、地元大学の看護学部と協働で健康向上プロジェクトを続ける予定です。

5. コミュニティ・ビジネスのための自然資源の利用・加工法を学ぶ事業

将来、コミュニティ・ビジネスにつないでいくために、身近な自然資源の多様な利用方法を学び、付加価値をつけて、商品化し市場を開拓しようとしています。身近な自然資源とは、食物や薬用植物などで、植林し森の多様性を増加させることで資源も増えていきます。

参加者のほとんどは成人女性でした。女性は、家計に責任を持ち、子どもの世話、家事、料理などの仕事をこなし、家族のことをよく知っています。彼女たちは出稼ぎに行くことなく、地域で収入を向上させるための努力を惜しみません。これからも一緒に学び、作り、使うことによって技術も向上することでしょう。また祖母について来た子どもたちも一緒になって楽しく実践しました。

場所：実践農場

日時	参加人数	活動
8 月 4 日	スタッフ 3 人	次回使用する砂糖ヤシの準備
8 月 15 日	ノーンメック村と周辺村の住民 24 人 (女 14 男 8 子ども 2)	砂糖ヤシからお菓子作り。またレモングラスオイルを蒸留して虫よけ水を製造。

10月1日	ノーンメック村住民15人(女13子ども2)、スタッフ3人	家計簿のつけ方学習@ローカルスタッフの家
10月13日	ノーンメック村と周辺村住民23人(女14男5子ども4)、スタッフ3人	レモングラス、コブミカン、パンダンリーフなど身近にある植物の効能と利用方法を学習
11月6日	ノーンメック村と周辺村住民15人、スタッフ5人	上記の薬用植物を利用したシャンプー、洗剤作り
2月12日	ノーンメック村と周辺村住民18人(女13男2子ども3)、スタッフ2人	薬用植物を利用したシャンプー、食器洗い洗剤作り

◆コミュニティ・マーケットに向けてのワークショップ

これまでノーンメック村とその周辺村において、有機農業の生産技術や知識の向上を目指して活動してきました。また自然資源の加工や商品化も考慮に入れた農業デザインを学び、自ら行う農業に応用する農民たちも増えてきました。今後、安定した地域の持続的経済を確立するためには、収入を十分に得る必要があるため、生産性向上と収穫物を加工して商品化する力を身につけ、生産者と消費者をつなぐ安全な生産物を扱う市場を発展させるための学びを続けてきました。この活動を発展させるために、具体的に「売る」行動を積極的に練習し、



将来、本物の市場を開発するトライアルとして、市場販売も兼ねたワークショップを開催しました。露天での販売が進むように買い物客に声をかけコミュニケーションの苦手意識を改善し、将来、地域住民の健康を守るマーケットを開催するために、毎月このようなワークショップ兼マーケットを設置することにしました。



マーケットの配置方法は、ノーンメック村の住民たちが率先してアイデアを出し合い、ブースやステージの設置準備をしました。2日間のマーケット開催では、多くの買い手がやってくる午前中に、それぞれ自分が生産し加工した商品を売り、一旦来客が落ち着いた11時ごろから、その場にいるすべての人が参加するワークショップを行いました。お菓子を作ったり、実験農場で進めている地下水の利用方法を所有者であるレックさんが関心ある人々に説明しました。音楽の演奏もあり、過ごしやすく参加しやすい雰囲気の中、一日約100人の訪問客がありました。彼らは、近隣村、同県内他郡、コンケン町、他県などの住民で、口コミやSNSなどで知ったり、有機農業研修で出会って繋がりを持った人々です。

日時	活動
5月8, 9, 14, 15, 16, 17日	市場の設置、準備
5月21-22日	実験農場で市場を開催 —加工食品、野菜などを販売

	ー参加者ととともにワークショップ ・お菓子作り（砂糖ヤシ、五色マメ） ・地下水の貯蔵方法
5月31日	リフレクション、次回のマーケットについて

参加した売り手数：25人（ノーンメック村住民16人、隣村住民1人、他県7人）

参加者の声

- ・畑に植えていたものを売ったのは初めて。買ってもらえると嬉しい。思っていたより楽しかった。
- ・市場について学ぶことが出来た。自分の田畑に何を植えたら良いのかが見えてきた。
- ・多くの人が店を出し、その中で自分も売ることができてうれしかった。
- ・遠くから来た人にも出会えて、おしゃべりし、情報交換し、助け合う。そんな場だった。
- ・何を植えたらいいのかよく計画して、毎月何を作ったら売れるか、加工の仕方を探します。
- ・こんな場を作ってくれてありがとう。収入も増えた。

初めての「マーケット」体験でしたが、生産者、売り手、買い手など様々な参加者の感想は総じて良く、当面、毎月第3土・日曜に同じ実験農場で開催することになりました。

6. 牛銀行プロジェクト



2013年から青少年の就労支援基金の設立を目指して始めた牛銀行プロジェクトも8年目を迎えました。様々な困難を乗り越え、牛の管理に責任を感じるようになり、牛銀行委員会の結束は強くなりました。そして村人たち自身が決める地域福祉を支援する事業となってきました。前年度は、子牛を売って得た利益を村の子どもたちに奨学金として還元しました。その他

にも牛の飼育で生じた牛糞などから堆肥を作り、有機農業推進に役立てることができます。化学肥料などの値段が高騰している中で堆肥の活用によって生産コストを下げることによって家計も楽になります。

2019年度から、干ばつのため6頭の母牛を一人の飼育者に任せていましたが、水不足の状況が改善したため、牛銀行の当初の形(3頭ずつ2人の飼育者)に戻そうと、コミュニティのために協働で牛を育てる責任感を持つ人であることを条件に周辺の村も対象として新たに飼育者を募集しました。その結果、隣村に住む2人に、2021年5月より飼育してもらうことになり、牛銀行委員会やスタッフたちが飼育された牛の様子を定期的を確認しています。

2021年度は新型コロナウイルス感染症のため、牛・水牛マーケットが開催されず、牛を売ることもできなくなりました。またランピースキン病（水や水牛が感染する伝染病）が流行し、多くの牛に影響を与えました。噂ではそのワクチン接種によって牛が不妊になることが多くなったとのことで、牛銀行の牛のうち1頭が何度種付けをしても不妊でした。ワクチンの影響だと村人は言っており、牛を手放し新たな母牛を購入しようかと委員会では相談しているところです。

【成果と課題】

2021年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大状況を見ながら安全を確保し、手探りで事業を進めました。学校も始まり、工場などの仕事も新型コロナウイルス感染症禍以前と同様に再開し、村人たちも忙しくなってきました。しかし新型コロナウイルス感染症感染は農村部でも広がり、ノンメック村とその周辺村でも多くの住民が陽性となり、自宅で隔離生活をするようになりました。感染者数が増えるたびに、行政も人々の集会を禁止するため、村外の研修や交流事業などはあまり実施することはできませんでした。特に子どもが集まることに保護者たちが不安に感じるため、子どもの居場所づくり事業（青年や地域住民のボランティア活動）では、特に行事を行わず、有機農業に関する集まりやワークショップも集落内で行わず、すべて実験農場や誰かの田畑で小規模に実施しました。

また実験農場は、学習の場を提供するだけでなく、2022年5月からコミュニティ・マーケットの場としても開放されるようになりました。これまで有機農業普及や植林活動などを通じて、身近な自然資源を有効利用しようと重ねてきた努力が、市場開発という方向に集約され、環境に優しい経済、「足るを知る農業」の実践の可能性が見えるようになってきました。

C. 海外プロジェクト助成事業

カンボジア王国のNGOであるKhmer Community Development(以下、KCD)を通じて、ベトナム国境沿いの村々の子ども会活動（ピース・クラブ）と有機農業推進事業を支援しています。新型コロナウイルス感染症拡大によってロックダウンが長く続きましたが、2021年度は少しずつスタッフも事業対象地に行けるようになり、様々な事業や活動も再開し始めました。

事業対象地であるプレックチュレイ村は、ベトナム国境と川で接しています。新型コロナウイルス感染症禍の前後に国境が閉鎖され、人々の生活に大きな変化を与えました。それまで市場、病院、学校などをベトナム側の施設に頼っていた多くの村人が、国境を越えることができなくなり、カンボジア国内で資源等を確保しなければならなくなりました。



新型コロナウイルス感染症禍の対応として、貧困家庭に対して家族の自給用に果樹や野菜の種苗、稚魚、ひよこなどの配布を続けました。またこれまで教育支援として、C4Cでは、図書室の整備や図書の寄付を続けてきましたが、それだけでなく子どもたちの学習意欲をあげるために、学習の副教材やオンライン交流の媒体として、スマートテレビやモバイル・Wi-Fiを4か所の学校・コミュニティ図書館に設置しました。そのうちの一か所では、移動図書館と銘打って、スマートテレビ、モバイル・Wi-Fiと図書をバイクでベトナム人居住地に運ぶ移動図書館を始めました。

一方、有機農業推進事業では、カンボジア人農民がタイで行う有機農業研修が新型コロナウイルス感染症のために実施できなくなりましたが、オンラインでタイ人からカンボジア人スタッフが草木染の技術をオンラインで何度も学びました。その後村のローカルスタッフと子どもたちに、青少年の能力向上事業の一環として教えるようになりました。今後どのような事業化するのかは子どもたちとスタッフが

一緒に考えていきます。

【成果と課題】

新型コロナウイルス感染症拡大の影響によって、中止、延期されていた事業が再開し始めました。県外への移動規制もなくなり、人々は自由に国内を動けるようになりました。今後は、これまでできなかった事業を再考しながら事業を継続していきます。新型コロナウイルス感染症拡大によって、人々の心、特に子どもたちの心も疲弊し、学習や将来の不安も生じています。カンボジア人スタッフたちも子どもたちを見守りながら、彼らが活動しやすい環境を整えることに尽力しています。今後は、いろいろな地域で育ち始めた子ども会のメンバーがオンラインなどを通じて、それぞれ地域での活動経験を紹介し合う場づくりなどを行っています。SNS や ICT を活用して、子どもたちの視野を広げ、現在の地域活動に刺激を与えていけるような支援活動を行っていきます。

また新たな活動として、安全な食を確保する習慣を小さい頃から身につけてもらうために、学校に有機農法によって菜園を作る事業を進めています。子どもたちと一緒に食や農について学びながら実践する計画です。今後も、子どもたちと寄り添い、彼らの可能性を引き出すスタッフたちと伴走していきます。

1-2. 国内支援事業「宮城県における連携・協働で取り組む福祉・防災学習推進事業」

『東日本大震災で甚大な被害を被った宮城県において、各地域全体の福祉力・防災力を高めるとともに、普段から、住民一人ひとりの命と暮らしを守ることを目指す。』

このことを実現するために、宮城県内で取り組まれる児童・学生・青年層が主体的に参画する福祉・防災学習の実施について、福祉・防災学習を実施・検討・計画されている地元の社会福祉協議会・NPO・学校等と連携・協働し、次のようなことに取り組みました。

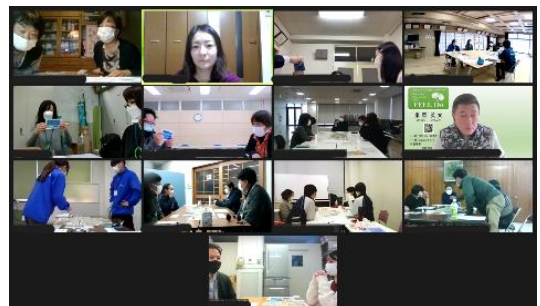
特に 2021 年度においては、2018 年度から取り組んできた東日本大震災の経験を教訓として今後につないでいくための防災ゲームの完成・普及や、仙台市内の大学生・女性グループと連携し取り組む防災レシピカレンダー製作などを通じて、東日本大震災から 10 年が経過した中での震災の教訓を伝える防災学習ツールの普及や、福祉・防災学習推進の担い手育成を目指しました。

1、福祉・防災学習プログラム・ツール研究開発事業

● 東日本大震災の経験を教訓としてつないでいく防災ゲームの開発

東日本大震災から 10 年の 2021 年完成を目指し、震災の風化が進む中、震災発生直後から県内各地でおこった助け合い活動を「あのときはよかった」で終わらせず今後に教訓としてつなげていく防災ゲームの作成に取り組んできました。

2018 年度に県内外の学生・若者・親子・防災専門家とともに企画会議を立ち上げ、2021 年度はゲームの完成までに 3 回（第 18 回～20 回）の企画会議を開催しました。ゲーム完成後は全国各地 19 か所で体験の機会を設けていただき、ま



た当会主催の体験会（対面・オンライン）も計3回開催しました。

2、福祉・防災学習担い手育成事業

● 防災レシピカレンダーの製作

宮城学院女子大学ボランティアサークル Food and Smile! (FAS)、東六郷・東部かあちゃん'ず、仙台市社会福祉協議会若林区事務所の協力を得て、誰にでも必要な「食」という切り口から防災が日常に溶け込み取り組んでいただきやすくなれば・若い世代が東日本大震災の教訓を学ぶきっかけになればと考え、防災レシピを掲載した2023年のカレンダーの製作を始めました。FASが考えた防災レシピを、東六郷・東部かあちゃん'ずの皆さんに震災当時の食生活についてヒアリングをしたり試食していただいたりしながら完成を目指し、カレンダーの形式にして販売します。

2021年度はFASと7回の打ち合わせを実施し、各月のレシピのテーマやレシピ案について検討を進めました。12月15日にはFASが東六郷コミュニティセンターを訪問し、東六郷・東部かあちゃん'ずの皆さんから震災当時の食生活やその課題について聞き取りを行いました。



3、福祉・防災学習実践支援事業

県内で実施される福祉・防災学習事業について、3つの地域で実践支援に取り組みました。

● 地域指定福祉教育推進事業（2019年度～継続）

主催：岩沼市社会福祉協議会（宮城県社会福祉協議会による指定事業）

「学校と地域をつなぎ、地域全体で福祉学習を推進する」ことをテーマに、市内の当事者団体と連携した福祉学習プログラムと、プログラムを掲載した冊子の作成に取り組みました。2021年度は市内当事者団体との打ち合わせを重ね福祉学習プログラムづくりに取り組み、福祉学習サポーター養成講座にて作成したプログラムの模擬授業を実施しました。（HumanBeingはアドバイザーを担当）（年間訪問回数…11回）

● おおさき福祉学習推進事業（2016年度～継続）

主催：大崎市社会福祉協議会

地域共生社会の実現に向けた、地域福祉推進の人材育成を目的とした福祉学習事業を実施。2021年度は本所・7支所の福祉学習担当職員とともに、前年度完成した「ふくしの学びハンドブック」の活用、福祉学習プログラムの勉強会に取り組みました。

（HumanBeingはアドバイザーを担当）（年間訪問・オンライン打ち合わせ回数…10回）



● 2021/8/4 「夏休み福祉体験「地域の人と大切な人をはげまそう！」

主催：色麻町社会福祉協議会

会場：色麻町農村環境改善センター

参加者：5人

内容：デイサービス利用者や大切な人に渡すシトラスリボン作成

3、福祉・防災学習推進のためのネットワーク構築事業

県内の関係機関と情報交換・相談対応等を行い、福祉・防災学習にかかわる情報収集・提供、ネットワーク構築に取り組みました。

2020年5月7日に開催したオンライン情報交換会「今年はどうする!?福祉学習・ボランティア体験」が好評だったことを踏まえ、2月1日に第2回福祉学習推進に関するオンライン情報交換会「なぜ、社協が防災学習に取り組むの？」を実施。全国から47の社会福祉協議会の皆さんにご参加いただき、実践報告と情報交換を行いました。



4、普及啓発のための情報発信事業

宮城での実践を活かし、県外でのアドバイザー業務・研修会の開催協力、メディア出演などに取り組みました。

- ・2021/8/7、10/9、2022/5/14 会津若松市社会福祉協議会「災害ボランティアサポーターゼミナール」
- ・2021/11/29、11/30 板柳町社会福祉協議会・横浜町社会福祉協議会「地域における福祉学習実践事業」(青森県社会福祉協議会指定事業)
- ・2022/1/17 高知県社会福祉協議会「令和3年度福祉教育実践研修」
- ・2021/8/10 ラジオ3開局25周年企画「250人の声」取材対応
- ・2021/12/13 DateFM「ラジオな気分」出演

【成果と課題】

● 福祉・防災学習プログラム・ツール研究開発事業

東日本大震災から10年の2021年完成を目指し、震災の風化が進む中、震災発生直後から県内各地でおこった助け合い活動を今後教訓としてつなげていく防災ゲームを2018年度から作成してきました。新型コロナウイルス感染症の影響で開発を休止した時期もありましたが、2021年度は企画会議メンバーとともに3回の企画会議を開催し、10月に一旦の完成を迎えることができました。

その後は宮城県内だけでなく、全国各地でゲームを体験・ご購入いただき、さっそく防災学習の実践現場で役立てていただいています。また内容のブラッシュアップや製作協力団体の変更などもあり、企画会議メンバーには随時状況を報告しながら引き続き協力をいただいています。防災学習の教材としてだけでなく、東日本大震災の教訓を発信するツールとして、今後も企画会議メンバーの力を借りながら丁寧に普及啓発に取り組んでいきたいと考えています。

● 福祉・防災学習担い手育成事業

2021年度からの新規プロジェクトとして、防災レシピカレンダー製作プロジェクトをスタートさせています。若者へ・若者と一緒に、2020年から転居してきた若林の皆さんと、震災の教訓を今後につない

でいく取り組みが何かできないかと考えており、2014年から連携させてもらっている Food and Smile! と若林区社協の協力を得ながら、防災レシピカレンダーの製作に取り掛かることにしました。2021年度は FAS と 8 回の打ち合わせ、かあちゃんずへのヒアリング、関係者との打ち合わせに取り組んできました。

Food and Smile!、東六郷・東部かあちゃんず、若林区社協、その他デザイン・印刷に関わってくださる皆さんなど、全国各地の方々の力をお借りして進めるプロジェクトになりますが、カレンダーとして年内にきちんと形になり世に出せるように、そして FAS の皆さんの学びにもなるように、丁寧に進めていきたいと考えています。

- 福祉・防災学習実践支援事業

県内で実施される福祉・防災学習事業について、3つの地域でサポートを行いました。特に2つの地域においては年間を通じて、地域共生社会の実現をめざした地域全体の福祉力を高めていくための福祉学習推進のサポートとして、福祉学習プログラムの目的や実践についての勉強会や、市内の当事者団体等と連携した福祉学習プログラムの開発支援などに取り組みました。

- 福祉・防災学習推進のためのネットワーク構築事業

2021年度に続き、オンライン情報交換会を開催。「なぜ、社協が防災学習に取り組むの？」をテーマに青森・高知の社協職員をゲストに迎え開催しました。全国から47の社会福祉協議会の皆さんにお申し込みをいただき、同じように悩みを抱えている方どうしの意見交換・情報交換の場を提供することができました。

約2年半かけて作成してきた防災ゲームが完成し、普及活動が始まりました。開発中はどのような反応をいただけるか不安もありましたが、たくさんのご好評の声をいただき、企画会議メンバーの皆さんとともに、風化していく東日本大震災の教訓を発信することができる・学校や地域での学びの場に活用したいと思っていただける防災学習ツールを作成できたことをとても嬉しく思っています。

防災レシピカレンダー製作もアウトプットとしてはカレンダーの完成・販売ということになりますが、若者世代に震災の教訓を伝えていく・防災学習の担い手のすそ野が広がっていく・そして地域と連携した活動になるよう、丁寧に取り組んでいきたいと考えています。

まだまだ新型コロナウイルス感染症禍の影響も大きいですが、これまでの2年間よりできることも少しずつ増えつつあり、オンラインも活用しながら、必要なことを進めていきます。

2. 文化交流活動支援事業

2-1. スタディツアー

◆タイ・オンラインツアー「オンラインで会いに行こう！タイ・ノーンメック村」

日時：8月8日13～15：00 参加者14人(組)

毎年、村で行われる田植えの『結』に日本から参加していましたが、昨年度に引き続きスタディツアーを催行できず、今回はオンラインで参加することにしました。実際に田植え中に撮影することは難しいため、いくつかの作業中の動画を流しながら、現地スタッフから活動の説明を受けました。村人へもカメラを向けると、緊張し恥ずかしがりながらも挨拶を返してくれました。

参加したのは、ノーンメック村を訪問したことがある人だけでなく、タイの有機農業や農村に関心をもった人も参加してくださいました。今回、植えた稲は収穫後、ツアー参加者に送られるお土産付きだったことも関心を持ってもらえた理由の一つだと考えられます。C4Cとしても初めてのオンラインツアーであったため、手際がよかったとは言えませんでした。新型コロナウイルス感染症禍で海外に行けないときに、一層直接交流の大切さを実感することができたようです。

◆フィリピン・オンラインツアー

「オンラインで会いに行こう！ フィリピン 障がいのある子どもたちが笑顔で育つ地域づくりの現場へ」

日時：11月23日(火・祝)10：30～12：30

会員の方、本イベントで初めてC4Cのことを知ってくださった方など、6の方が参加してくださいました。日本は祝日でしたが、フィリピンは平日のため、普段の活動の様子を見ていただくことができました。代表マリベルさんに活動全体のお話をさせていただいた後、リハビリテーションセンター内のツアーを開催し、子どもたちが理学療法や作業療法、自立生活プログラムのサービスを受けている様子を見ていただきました。参加者の皆さんからは、「フィリピンならではの取り組みはありますか？」や、「障がい児・者の福祉サービスにはどういったものがありますか？」など、様々なご質問をいただき、高い関心を寄せて参加くださったことが伝わってきました。

フィリピンの現地スタッフたちも、参加者の皆さんに普段の活動を見ていただけたことをとても喜んでいました。

2-2. Zoom でつなぐ C4C 4 か国会議—国際ネットワーク交流

新型コロナウイルス感染症ウイルス感染拡大のため、各国の事業が滞るなか、先が見通せない状況をどうすればいいのかを話し合うなかでオンライン交流のアイデアが出てきました。そこで、これまでC4Cと関わってきたけれどもお互いの活動についてあまり周知してこなかった各国の代表たちによる国際ネットワーク交流をしようということになりました。

異なる地域で、異なる対象に対して、異なる方法論を用いるにも関わらず、お互いに相通じるものや学び合える経験があることを知り、自らの活動の刺激になったようです。また誰でも幸せに暮らすことができるような地域づくりや支援への熱い目的意識が共通してあることも新しい発見でした。事業の代表が語るだけでなく、ローカルスタッフや事業対象者もオンライン報告に参加することもあり、実際の活

動の様子を見聞きすることもできます。直接訪問できない代替案として始めましたが、オンラインだから参加できる遠くの人や人前にでるのが恥ずかしい村人などにも会うことができます。今後もできる限り続けていく予定です。

	日時	話題提供者	話題
第1回	8月28日	各国の代表4人	この仕事を始めたきっかけ
第2回	9月25日	JPCom-CARES 代表マリベル	フィリピンでの活動（障がい児・者リハビリテーション・センター）
第3回	10月30日	タイ・トゥック	タイ・ノンメック村での活動（コミュニティとの協働）
第4回	11月28日	KCD 代表ソーカ	カンボジアでの活動（子ども会支援）
第5回	1月29日	HumanBeing 菅原清香	日本・宮城での活動（防災学習と支援）
第6回	3月5日	タイ・トゥックと婦人グループ	現在の活動紹介
第7回	4月10日	KCD スタッフと子ども会メンバー	コミュニティ・ライブラリと子ども会活動
第8回	5月28日	JPCom-CARES マリベル	新型コロナウイルス感染症禍下での活動

3. 視察・研修・ワークショップ事業

3-1. 研修事業

1. タイにおけるカンボジア人有機農業研修(オンライン)

毎年、8月にカンボジア人農民をタイに招聘して有機農業実践者から学ぶ研修を行っていましたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響によって、国境を越える交流ができなくなりました。その後2020年度にカンボジア側から草木染に特化したオンライン研修をしたいという要望が出て、「草木染研修」としてプノンペンにいるスタッフに対する研修を続けています。2021年度は2回行いました。年度後半は、新型コロナウイルス感染症による規制も緩んだため、様々な事業が再開される中、スタッフがローカルスタッフや子ども会のメンバーに草木染を教え始めました。



日時：第5回6月15日、第6回7月27日、第7回8月24日、第8回11月10日

3-2. 国内 IDoCafé（あい・どう・かふえ）事業

◆IDoCafé vol.17 「宮城発！防災ゲーム体験会」

日時：4月23日@大阪府社会福祉会館会議室402 参加者；4人

C4Cと連携して宮城県で福祉防災学習普及事業などを行う「くらしの学びサポートオフィス HumanBeing」

の菅原清香さんが2年半に渡りチームで開発を続けてきた防災ゲームが完成したので、そのお披露目を兼ねた体験会を開催しました。

実際に体験してみると、誰かが誰かに伝えるというより、ゲームをしながら参加者がそれぞれ震災の体験を語り合ったり、クイズの答えを考えながらおしゃべりすることが重要であるとわかりました。職場、学校または家庭で、このようなゲームを通じて各人が日々の防災や福祉を考えることが多くの人に伝えることにつながるのでしょうか。

新型コロナウイルス感染症の影響もあり3年近く開催できなかった事業ですが、参加者は少ないながらも防災に関心を持つ社会人ばかりが集まり、実りあるお話ができたようです。久しぶりに直接人と人が直接会うことは大切であると再確認する機会にもなりました。



4. パートナーシップ推進事業

4-1. 調査事業

(1) 宮城県における地域一体で取り組む福祉・防災学習推進事業のための調査
調査実施者：Human Being 菅原清香会員

宮城県および周辺県等において、国内事業「福祉・防災学習推進事業」の実施主体を訪問し、ヒヤリング調査、研究、事業実施に関する意見交換を行いました。C4Cの各事業と当事業との調整も行いました。

5. 情報提供事業

5-1. ホームページ、ブログ、Facebookによる情報発信

今年度は、C4Cだよりは2回の発行、ホームページの活動ブログの更新は2回にとどまりました。現地の活動状況をリアルタイムでお伝えできるように、次年度は更新頻度をあげていきます。

5-2. イベント参加

新型コロナウイルス感染症禍下、対面型イベントが開催されず、またオンラインも限定的な広がりしかもたないものが多かったため、参加しませんでした。

6. 組織運営

◆2021 年度会員について

2021 年度会員・寄付者

人数の変動

		2019 年度	2020 年度	2021 年度
正会員数	個人	15	12	13
	団体	0	0	0
賛助会員数	個人	23	15	20
	団体	1	0	0
使途指定寄付	指定寄付(宮城防災)	1	1	0
	フィリピン・奨学金	1	1	0
	フィリピン・ラン	18	0	0
	フィリピン・ラン・スポンサー	8	0	0
	タイ・ノンメック村	0	0	1
一般寄付		7	6	9

新型コロナウイルス感染症禍下で国内外の事業が制限される中、励ましの言葉とともに変わらぬ支援を得ることができました。スタディツアーや国内のイベントなども催行することができず、新しい会員を開拓する機会がなかったにも関わらず、応援してくれる会員や寄付者がいることがこれほど心の支えになった年はありませんでした。



2021年度 貸借対照表 2022年5月31日現在 (円)

資産の部		負債の部	
流動資産		流動負債	
現金	21,375	未払金	167,669
普通預金	161,385	預り金	6,662
流動資産合計	182,760	流動負債合計	174,331
固定資産		固定負債	
什器備品	319,911	固定負債合計	0
固定資産合計	319,911	負債合計	174,331
		正味財産の部	
		前期繰越正味財産	-4,611
		当期正味財産増減額	332,951
		正味財産合計	328,340
資産合計	502,671	負債及び正味財産合計	502,671

2021年度 本来事業の会計 財産目録

2022年5月31日現在 (円)

科 目	摘 要	金 額		
資産の部				
流動資産				
現金		21,375		
普通預金		161,385		
--三井住友銀行		779		
--ゆうちょ銀行総合口座		160,606		
流動資産合計			182,760	
固定資産				
什器備品		319,911		
固定資産合計			319,911	
資産合計				502,671
負債の部				
流動負債				
未払金		167,669		
預り金		6,662		
流動負債合計			174,331	
固定負債				
固定負債合計			0	
負債合計				174,331
正味財産合計				328,340

2021年度 損益計算書（予算対比）
 2021年06月01日～2022年05月31日(配賦)
 一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン 本来事業の会計

(収入の部)

(円)

	科目	予算額	決算額	予算残額
1.	会費収入			
	正会員受取会費	300,000	130,000	170,000
	賛助会員受取会費	300,000	115,000	185,000
2.	寄付金			
	一般寄付	11,300,000	12,559,300	-1,259,300
	フィリピンの障がい児者応援寄付		12,458	-12,458
	使途指定寄付(タイ)	0	5,000	-5,000
3.	事業収入			
	フィリピンスタディツアー事業収入	0	0	0
	タイスタディツアー事業収入	40,000	29,820	10,180
4.	民間助成金	0	0	0
5.	雑収益			
	受取利息	0	34	-34
当期収入合計(A)		11,940,000	12,851,612	-911,612

(支出の部)

事業費

	科目	予算額	決算額	予算残額
■NGO支援事業				
海外支援事業費				
	フィリピン・JPCOM-CARES 支援	4,099,297	4,099,297	0
	タイ農村コミュニティ支援	1,856,398	1,856,398	0
	調整にかかる海外渡航費等	100,000	14,500	
事業助成事業費				
	海外プロジェクト助成 (カンボジアKCDJ)	663,312	1,403,835	-740,523
	調整にかかる海外渡航費等	100,000	6,000	94,000
日本支援事業費				
	宮城県における福祉・防災学習推進事業	943,000	1,384,996	-441,996
	■NGO支援事業計	7,762,007	8,765,026	-1,003,019
■文化交流活動支援事業				
	フィリピンスタディツアー事業費	0	6,888	-6,888
	タイスタディツアー事業費	40,000	6,970	33,030
	■文化交流活動支援事業計	40,000	13,858	26,142
■視察・研修・ワークショップ				
	国内IDoCafe 事業費	30,000	17,168	12,832
	招聘視察・研修事業費	100,000	75,460	24,540
	■視察・研修・ワークショップ計	130,000	92,628	37,372
■パートナーシップ推進事業				
	調査事業費	2,800,000	2,400,000	400,000
	■パートナーシップ推進事業計	2,800,000	2,400,000	400,000
■情報提供事業				
	情報提供事業費	30,000	11,580	18,420
	■情報提供事業計	30,000	11,580	18,420
事業費支出計		10,762,007	11,283,092	-521,085

(支出の部)

	科目	予算額	決算額	予算残額
管理費				
	給料手当	650,000	691,200	-41,200
	旅費交通費	50,000	36,000	14,000
	会議費	10,000	22,110	-12,110
	通信運搬費	50,000	44,280	5,720
	消耗品費	90,000	44,870	45,130
	印刷製本費	30,000	25,410	4,590
	保険料	60,000	65,380	-5,380
	支払地代家賃	120,000	120,000	0
	諸会費	15,000	25,000	-10,000
	支払手数料	20,000	35,136	-15,136
	租税公課	2,000	12,200	-10,200
	減価償却費	0	63,982	-63,982
	法人税、住民税及び事業税	70,000	50,000	20,000
管理費計		1,167,000	1,235,568	-68,568
当期支出費用合計(B)		11,929,007	12,518,660	-589,653
当期収支差額(A)-(B)			332,952	
前期繰越金(C)			-4,611	
次期繰越金(A)-(B)+(C)			328,341	

2022年度（2022年6月1日～2023年5月31日）事業計画書

Community 4 Children
2022年6月1日～2023年5月31日

1. NGO 支援事業

1-1. 海外支援事業

フィリピン国 JCom-CARES への支援とタイ国ノンメック村コミュニティ支援事業は継続します。各地の現地の団体や個人が主体的に助成金等の多彩な財源を獲得できるよう、C4Cからもアドバイスをを行います。

A. JCom-CARES(フィリピン共和国バギオ市、ハッピー・ハロー村、ベンゲット州カバヤン町)

これまで行ってきた活動に加えて、2021年度に取り組むことができた地域へのアウトリーチ活動をすすめて行きます。地域で暮らす障がい児・者やそのご家族、区のリーダーや当事者グループなどと協力して地域の自助グループを組織し、障がい児・者が暮らしやすい地域づくりに向けた活動計画づくりを行っていく予定です。また、感染予防のため個別支援で行ってきた自立生活プログラムですが、グループでの活動も再開していきたいと考えています。メンバー同士が互いに刺激し合いながら様々なスキルを習得し、力を合わせて取り組むことで繋がりが育まれていくことを目指します。

B. タイ・ノンメック村コミュニティ支援（タイ王国コンケン県）

新型コロナウイルス感染症の影響を見ながら、村人でもあるローカルスタッフを中心に、これまでと同様に、安全な食をもたらす知識や実践として有機農業や森林保全活動を続け、健康にいい食生活を目指します。子どもたちを支えるためには、コミュニティ自体の繋がりを強化しなければならないと考え、これまで以上に稲作や植林活動における『結』へ多くの人の参加を求めていきます。そしてすべての活動をマーケットへと集約し、市場で売ることを念頭において農業経営や家計を再編成する研修を行います。月に一度実験農場でワークショップを行いながら実際にマーケットを開き、市場運営、広報、ネットワークづくりなどをともに学んでいきます。その場では、大人も子どもも楽しく参加できるような仕組みを参加者とともに考えます。また放課後や週末の子どもの居場所として、ローカルスタッフの屋敷地内を開放し、ボランティアも募って少しずつ子どもたちのためになる活動を増やしていく予定です。

C. 海外プロジェクト助成（短期の事業単位での助成）

Khmer Community Development (KCD) -カンボジア国カンダール州プレックチュレイ村とその周辺村において、子ども会活動の支援を継続して行います。新型コロナウイルス感染症の状況をみながら、対面だけでなくオンラインでも学習支援（移動図書館など）や交流（他地域の子ども会と）ができるような活動を増やしていきます。有機農業研修は、状況と必要性を現地団体と話し合いながら事業を進めるかどうかを検討していきます。

1-2. 国内支援事業

A. 宮城県における連携・協働で取り組む福祉・防災学習推進事業

東日本大震災の経験を教訓として今後につないでいくための防災ゲームの完成にともなう普及・啓発活動、防災レシピカレンダー製作を通じた担い手育成、県内を中心とした福祉・防災学習実践支援などを通して、東日本大震災から10年が経過した宮城における東日本大震災の教訓の伝承や、福祉・防災学習推進の担い手育成・基盤づくりを目指します。

B. 国内プロジェクト助成

日本国内で子どもたちを中心とした地域づくり等を行っている団体のヒアリング調査・視察を実施し、対象事業を検討し、支援要請があった場合に、別に定める助成要項に沿ってその都度検討します。

2. 文化交流活動支援事業

2-1. スタディツアー

A. タイ・スタディツアーの実施

新型コロナウイルス感染症の影響で直接現地に行くツアーの開催予定はありません。

B. フィリピン・スタディツアーの実施

オンラインでの開催を検討しています。

C. カンボジア・スタディツアーの実施

新型コロナウイルス感染症の影響で開催予定はありません。

2-2. 国際交流事業

新型コロナウイルス感染症の影響で青少年国際キャンプの開催予定はありません。しかしオンラインでの開催を検討しています。

3. 視察・研修・ワークショップ事業

3-1. 視察・研修事業

理事、社員、寄付者、専門家を中心とした現地視察、連携団体に所属するスタッフ、利用者への研修、および連携団体間の交流を実施します。

- ・ 日本、タイ、フィリピンをはじめラオス、カンボジアなどのアジア諸国で、C4C と関連する活動を行う団体、個人との相互交流を図ります。
- ・ 日本国内での現地報告会、講座や演習の開催、講師派遣
- ・ 子どもを中心とした地域づくり推進を目的とした講座や演習の実施、もしくは講師およびアドバイザーの派遣

3-2. 国内 IDoCafe 事業（年2回開催予定）

IDoCafe は、何らかの想いを形にし、社会に貢献しようとする人々が、ディスカッションを通じて新しいつながりを生み出す場です。国内での情報発信のために、オンラインで開催を計画します。

4. パートナーシップ推進事業

4-1. 調査事業

- ・ 日本、タイ、フィリピンをはじめ、ラオス、カンボジアなどのアジア諸国で、子どもたちを中心とした地域づくり等を行っている団体のヒアリング調査・視察を実施し、対象事業を検討し、パートナーづくりを進めます。
- ・ 昨年度に引き続き、アジアや日本で活動する団体へ調査員を派遣すると同時に、これまで出会った団体との交流を深め、現場の状況やニーズから支援のやり方やあり方の相互理解を進めます。
- ・ 宮城県における福祉・防災学習推進事業を推進するための調査研究・調整を年間委託して行います。

4-2. ホームページやブログなどを通じて、C4C の取り組みを発信しパートナーづくりを進めます。

5. 情報提供事業

5-1. ホームページ、ブログによる情報発信

ホームページや Facebook、C4C だよりの発行や活動ブログの更新を通して、C4C の取り組みを発信していきます。

5-2. イベント参加

ワンワールドフェスティバル等、国際協力や地域づくりに関連する様々なイベントに参加し、C4C の活動を紹介します。

5-3. 支援キャンペーン

支援団体や支援事業への寄付や参加を呼びかけるキャンペーンを実施します。

5-4. 現地提携団体への情報提供

世界の動向をはじめ、活動をサポートする情報を提供します。

6. その他

上記の他、C4C の目的を達成するために必要な事業を実施していきます。

2022年度 一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン事業収支予算書

2022年6月1日～2023年5月31日

		金額 (円)	備考
(収入の部)			
1. 会費収入			
	正会員会費	300,000	
	賛助会員会費	300,000	
2. 寄付金収入		12,000,000	
3. 事業収入			
	フィリピンスタディツアー事業収入	0	
	タイスタディツアー事業収入	0	
4. 民間助成金		0	
当期収入合計 (A)		12,600,000	
(支出の部)			
1. 事業費			
■NGO支援事業			
海外支援事業費		(JICA 精算レート 2022年7月に準ずる)	
	タイ・農村コミュニティ支援	2,255,802	580,680 タイ・パーツ
	フィリピン・JPCOM-CARES 支援	3,474,151	1,399,784 ペソ
	調整にかかる海外渡航費等	200,000	
事業助成事業費			
	海外プロジェクト助成	2,400,000	カンボジア KCD 支援\$18,000
	調整にかかる海外渡航費等	200,000	
日本支援事業費			
	宮城県における福祉・防災学習推進事業	690,000	
■文化交流活動支援事業			
	フィリピンスタディツアー事業費	0	
	タイスタディツアー事業費	0	
	国際交流事業費	0	
■視察・研修・ワークショップ			
	国内 IDocafe 事業費	30,000	
	招聘視察・研修事業費	100,000	
■パートナーシップ推進事業			
	調査事業費	2,700,000	調査研究業務委託費 240万円 (宮城県) 含む
■情報提供事業			
	情報提供事業費	30,000	HP 管理、イベント参加料等
事業費計		12,079,953	

2. 管理費			
	給料手当	800,000	事務パート 1 名委託 1 名
	旅費交通費	50,000	
	会議費	10,000	
	通信運搬費	30,000	
	消耗品費	90,000	
	印刷製本	30,000	
	保険料	60,000	
	支払地代家賃	120,000	
	諸会費	15,000	
	支払手数料	20,000	
	租税公課	2,000	
	法人税、住民税及び事業税	70,000	
	管理費計	1,297,000	
当期支出合計 (B)		13,376,953	
当期収支差額 (A) - (B)		-776,953	
前期繰越金 (C)		328,341	
次期繰越金 (A) - (B) + (C)		-448,612	

